

人海戦術が頼りとは(1995年3月号掲載・橘 和臣)

「これは、ただ事ではないな」

停電で真暗闇。懐中電灯の光の中に浮かび上がった模様替えをしたような部屋のあり様を見て、まず署に連絡をとった。

「電話が通じず連絡がとれないでいる」という返事。何人かに連絡をとるがやはり不通。すぐにバイクで出勤した。

途中の長田区では、軒並家は潰れ、あちらこちらで、のろしのような黒煙が立ち昇り、東へ行くほど地獄絵はひどくなる。一番近い生田へ直行。隊員が来るのを待ちわびた様子の救急隊長の一声は、「よく来てくれた。すぐに着替えて出発しよう」だった。広報車に可能な限りの救助資材を積み込み出勤。

現場は、古い軽量鉄骨造 4、5 階建てのアパートで 4 棟並んでいるが、いずれも 1 階部分が北側に押し潰され生き埋め者がいることは、一目瞭然であった。近くまで行くと、我々を見つけた市民が、助けを求めてきた。生存しているのが不思議なくらいで、2 階の床は、高さ 40 センチぐらいにまで落ちており、その間に壁と家具類が、びっしりと詰まっている。その上、鉄筋が、何層にも行く手をはばんでいた。声をかけると、「苦しい早く助けて下さい!!!」と 5、6 メートル奥から苦痛の声「すぐ助けるから、しっかりしろ！」と声をかけ作業にかかる。ルーカス・カッターで鉄筋を切り、入口を作る。そして、スプレッターのこぎり等で壁、家具類を破壊しながら、わずか 40 センチぐらいの空

間へもぐり込み、場所を確認しながらひたすら破壊作業をくり返す。やっとの思いで要救助者の所まで辿りついた瞬間「ドドド」震度 4、5 の余震。後ろ向きのまま、這って逃げようとしたが身動きが取れず、この時ばかりは、死を覚悟した。救出活動から 5 時間ぐらいかかってようやく生存者を救出する。

ほっとする間もなく、次々と救助を求める市民の声が耳に飛び込んでくる。

ほとんどが全壊状態の家屋であり、下敷きとなると人の力だけでは到底ガレキを取り除いて救出することは不可能に近い。

自ずと市民の救助隊に寄せる期待は大きく、それは祈りにも近いものがあり、我々もそれに応えるべく力の限りを尽くすのだが、これほど甚大な被害を出す大災害の前には、我々の努力も無に等しい……。

原始的ではあるが『人海戦術』に頼らざるを得ないが、人も機材もあまりに足りなさすぎるのだ。

この『人員』と『機材』の不足は、救助を求める市民にとってもまた救助する隊員にとっても考える余地のないほど相当に深刻で生死を分ける大きな要因の一つになったといっても過言ではないだろう。